

Gower の言語観

菅野正彦

Gower の *Confessio Amantis* の第七巻はアリストテレスによる「アレキサンダーの教育」に当てられており、通称「王道の書」とも呼ばれている。Gower は「時を楽しく過ごすため」(the time lisse ‘? to make the time pass pleasantly’) にこの話をするのだと述べているが、聴衆が喜んで聞くような内容の話でもなく、文字通りに解するのは難しい。多少、冗談めかして言っているのかもしれないし、本音かもしれない。彼の念頭には Richard 二世に対する指南書、即ち進講の書にしたいという考えがあったであろう。先ず、Gower はラテン語の頭注 (head-piece) で教育の必要性を喚起する。即ち、教えは幸福をもたらし、教育されない人は富 (opem) を手に入れられない、教えは自然に打ち勝つ。教えは生来の才能が与えなかったものを人に与えるであろう。より賢くなるために、賢明なる支配者は自ら教育を行なうのである。

Omnibus in causis sapiens doctrina salutem
Consequitur, nec habet quis nisi doctus opem.
Naturam superat doctrina, viro quod et ortus
Ingenii docilis non dedit, ipsa dabit.
Non ita discretus hominum per climata regnat,
Quin, magis vt sapiat, indiget ipse scole. (7. i. 1-6)

以下に見られるように ‘Prologus’ の冒頭で、Gower は「頭が悪く、感が鈍く、学が乏しく、怠惰なへぼ詩人であるから些細な事を歌い、ブルート島で歌われるヘンギストの言葉で、カルメンティスに助けられ、イギリスの韻律で語り、骨のない言葉が骨を砕き、私の詩を曲解する人はここから立ち去れ」と述べている。彼は高尚な主題を書く力がないこと、中身の貧弱さを美辞麗句を連ねた文体で書く意思のないことを公言する。最初に指摘しておく、彼のモラリストとしての姿勢が最後まで貫かれる。

Torpor, ebes sensus, scola parua labor minimusque
Causant quo minimus ipse minora canam :
Qua tamen Engisti lingua canit Insula Bruti

Anglica Carmente metra iuuante loquar.
Ossibus ergo carens que conterit ossa loquelis
Absit, et interpres stet procul oro malus. (Prol. i. 1-6) 1

Vox Clamantis 『叫ぶ者の声』で、Gowerは「邪な解説者をして、私に対して如何なる怒りも起こさせてはならない」と強い口調で釘を刺している。

Non malus interpres aliquam michi concitet iram.
(*Vox Clamantis*, III. Prol. 61)

ヘンギストを持ち出した理由は、明らかに Gower が歴史的な展望に立って発言している証拠である。彼は英語の歴史を念頭に入れて発言している。即ち、410 年頃までにはローマ軍は危急存亡に遭遇して、ブリテン島から撤退して本国へ帰った。ブリテン王ヴォーティガン (Vortigern) は北方のピクト族やスコット族の侵入を防ぐために、大陸のヘンゲスト (Hengest) とホルサ (Horsa) に救援を求めた (449 年)。しかし、彼らは途中で寝返りを打ち、そこに定住した。かくして、ブルトン人は辺境に追いやられ、爾来ゲルマン人がブリテン島を支配することになった。

イシドールの *Etymologiae* (i. 4.1) によると、‘Carmentis’ はイタリア人にラテン語を与えた女精であり女予言者であった。Gower も次のように述べている。

Carmente made of hire engin
The ferste lettres of Latin,
Of which the tunge Romein cam. (4.2637-39)

上で述べたように、彼は「舌が骨を粉々に打ち砕く」(Walz no. 35) という諺を再三使っている。舌は骨を持っていないけれども、固い骨を粉々に砕くのである。

For men sein that the harde bon,
Although himselven have non,
A tunge brekth it al to pieces. (3.463-65)

Gower はおしゃべり (lingua loquax) の害を原級 (mala), 比較級 (peior), 最上級 (pessima) を使って強烈に非難している。おしゃべりは骨はなくとも、骨を砕く。

Res mala lingua loquax, res peior, pessima res est,
Que quamuis careat ossibus, ossa terit : (*Vox Clamantis*, V. 921-22)

Gower は修辞学 (Rethorique) について、自分の考えを第七巻 (1506 行以下) で具体的に説

明している。先ず、ラテン語で要約されている頭注では、美文よりも真実が重視されることが記されている。

Compositi pulcra sermonis verba placere
Principio poterunt, veraque fine placent.
Herba, lapis, sermo, tria sunt virtute repleta,
Vis tamen ex verbi pondere plura facit. (7. v, 1-4)

構成された文体の美しい言葉は、最初は耳に心地よいが、最後に人を喜ばせるものは真実 (vera) である。世の中に効力を有するものが三つ存在する。それらは薬草と宝石と言葉である。そして、その中で言葉が一番威力を発揮するのである。

『叫ぶ者の声』に、友好的な口づけが平和を確証するものではないという表現が現れる。一般に、諺としては “If the beginning is good, the end must be perfect,” “A good beginning makes a good ending,” “An ill beginning, an ill end” 等に見られるように、「始め良ければすべて良し」というのが普通である。しかし、Gower の表現は逆で、最初に約束されたことが最後まで確実に守られることは稀である。

Non tua conceptam michi firmant oscula pacem,
Nam tua principia finis havers negat. (*Vox Clamantis*, II, 137-38)

疑わしい物に信 (certum) を置かないように。明るい良い希望 (spes bona) はしばしば幻によって欺かれ、人は悲哀を感じる。先述した通り、始めが大事であるけれども「事の始めは結末を知らず」である。「疑わしいもの」“res ambigua” は、「両義的な、曖昧な」言葉という意味でもある。

Rebus in ambiguis tu certum ponere noli,
Fallitur augurio spes bona sepe suo :
Est magis humani generis iactura dolori,
Nescit principium quid sibi finis aget. (*Vox Clamantis*, VI, 751-54)

この反対に、「終わりよければすべて良し」“All is well that ends well” という諺がある。仕上げが肝心ということである。*Gesta Romanorum* (Tale LXVII) に “Si finis bonus est, totum bonum erit” と現れる。一説によると、これがその諺の元祖とも言われている。何れにしても、当初の状況が最後にどのような状況になるか不明なのである。

創造主である神は、人間に言葉を与えた。神から授かった贈り物を悪用しないように心掛けるべきだ。言葉によって人間は自由に心の思い (herthes thought) を表現することができる。即ち、心の中にあるものを外に示すことができるようになった。これは、自然界に存在する

他の生物には決して見られない現象である。

Above alle ertthli creatures
The hihe makere of natures
The word to man hath yove alone,
So that the speche of his persone,
Or forto lese or forto winne,
The hertes thoght which is withinne
Mai schewe, what it wolde mene; (7.1507-13)

「哲学」では、言葉は「徳の教師」(the techer of vertus) と呼ばれている。ここにも Gower の言語観がはっきりと表れている。言葉遊びや曖昧な表現が入る余地は全く残されていない。彼の目には曖昧な言葉や表現は二枚舌に思われた。言葉は神から人間に授けられたものであるあら、神の教え、即ち、徳を映し出すものでなければならない。

For word the techer of vertus
Is cleped in Philosophie. (7.1520-21)

Gower は、三学科 (trivium) の中で特にこの修辞学を最上位に置いているが、彼の修辞学をよく検討すると、通常修辞学とは趣を異にしている。一般に修辞学は言葉を飾る学問であるが、彼の定義に従うとレトリックは「道理に叶った言葉に捧げられる」学問なのである。彼の修辞学はどちらかと言えばむしろ論理学に近いもので、弁論術は適切な言葉を好ましく使うのに役立つように、文法と論理学を従え、この双方が談話に役立つのである。文法の仕事は正確に話すことを人に教え、論理学は筋道の通った判断を下すために、平明な言葉によって真と偽とを区別する学科である。

Is Rethorique the science
Appropred to the reverence
Of wordes that ben resonable :
And for this art schal be vailable
With goodli wordes forto like,
It hath Gramaire, it hath Logiqe.
That serven bothe unto the speche. (7.1523-29)

「初めに言^{ことば}があった。言は神とともにあった。言は神であった。」と『ヨハネによる福音書』の冒頭に述べられているように、キリストは「言葉」であるから、神によって造られた人間が言葉を乱用することは真理(神)に対して罪を犯すことを意味する。従って、修辞学の必須条件は真理であるとするプラトン・アリストテレス的伝統に Gower は従っている。彼にとっては、真理を無視して言葉が説得 (persuasion) のために使われることは、間違った修辞

学なのである。この点が、Chaucer 等の修辞学と根本的に異なり、Gower の修辞学に対する特異な見解である。

石や草には優れた効能がある。しかし、言葉は善きにつけ悪しきにつけその活動 (doinges) において最も効力がある。冒頭で引用した頭注のラテン語は、次のように英語に翻訳される。

In Ston and gras vertu ther is,
Bot yit the bokes tellen this,
That word above alle earthli thinges
Is vertuous in his doinges,
Wher so it be to evele or goode. (7.1545-49)

ラテン語の 'virtus' と同様に、英語の 'vertu' にも二つの意味が含まれている。'the techer of vertu' (7.1520) に見られたように、一つは「美德」'moral excellence, goodness' の意味であり、他の一つは「力」'physical strength, power' の意味である。次の 'vertuous' は「言葉の威力」'of word or speech: having great power or influence, mighty' の意味であり、逆に 'vertules' は「(石の) 効力がない」'Of a stone: lacking talismanic power' という意味である。

For love above alle othre is hed,
Which hath the vertus to lede,
Of al that unto mannes dede
Belongeth: (4.2326-29)

The seconde [star] is noight vertules;
Clota or elles Pliades
It hatte. (7.1319-21)

バルドスは穴の中から大きな蛇を助けてやった。その蛇から宝石を貰った。それを商人の所に持って行って売って、家に帰ると元通り自分の財布の中に入っている実に不思議な宝石であった。それは宝石の力である。

It is the vertu of the Ston. (5.5111)

ネクタナブス (Nectanabus) はアレキサンダーに自然魔術 (Magique naturel, 7.1301) の知識を授けた。15 の星があり、それぞれの星に一つの草 (a gras) と石 (a Ston) が所属し、ものを上げたり下げたりする数々の奇蹟 (many a wonder, 7.1307) を行うのである。

'vertu' は「薬効」'medicinal potency' という意味である。

The ferste sterre Aldeboran..
lich is of condicion

To Mars..
His herbe is Anabulla named,
Which is of gret vertu proclaimed. (7.1318)

And ek his herbe in special
The vertuous Fenele it is. (7.1327)

MED も ‘vertuous’ を「(植物等の) 薬効がある」という意味に解している。

Gower はものを言わないで、黙っていては何も成功しないことを指摘する。言葉に出すことを奨励している。

For specheles may noman spede. (1.1293)

口をきかない人は滅多に土地を得られない。言葉は偉大な力を秘めている。

For selden get a domb man lond :
Tak that proverbe, and understond
That wordes ben of vertu grete. (4.447-49)

猛獣も言葉によって手なずけられ、蛇も言葉によって魔法に掛けられる。武人の間では、薬がなくても言葉の呪文 (the charmes [Of word]) によって傷が癒される。

With word the wilde beste is daunted,
With word the Serpent is enchaunted,
Of word among the men of Armes
Ben woundes heeled with the charmes,
Wher lacketh other medicine ; (7.1565-69)

言葉は魔法の文字をも支配する。‘karectes’ は「文字」‘a written symbol’ の意味である。

Word hath under his discipline
Of Sorcerie the karectes ;
The wordes ben of sondri sectes,
Of evele and eke of goode also. (7.1570-73)

このように、言葉には善悪いろいろな種類 (sectes ‘kind or sort’) がある。言葉は敵を味方に、味方を敵に、平和を戦争に、戦争を平和に、世の中を好きなときに紛糾させ (entriketh ‘to involve in perplexity’), 和解させる。言葉はあらゆるものを反目させたり (odde) 調和させたり (evene) する。言葉は神を喜ばせる、言葉は言葉によって鎮められる。穏やかな言葉が騒々しい言葉を静めるのだ。善が欠けると、悪を償うために言葉が満たしてくれる。言葉に

歌が混じると、言葉は一層快いものになる。Gower はここで言葉の効用を思う存分展開する。

The wordes maken frend of fo,
 And fo of frend, and pes of werre,
 And werre of pes, and out of herre
 The word this worldes cause entriketh,
 And reconsileth whan him liketh.
 The word under the coupe of hevene
 Set every thing or odde or evene ;
 With word the hihe god is plesed,
 With word the wordes ben appesed,
 The softe word the loude stilleth ;
 Wher lacketh good, the word fulfillleth,
 To make amendes for the wrong ;
 Whan wordes medlen with the song,
 It doth plesance weel the more. (7.1574-87)

Gower は ‘With word’ を行頭に繰り返して、特に強調している点に注目してよい。
 また彼は、歌 (song) の効用も指摘している。これは ‘Prologus’ で、既に言及されていた
 ことである。

Bot wolde god that now were on
 An other such as Arion,
 Which hadde an harpe of such temprure,
 And therto of so good mesure
 He song, that he the bestes wilde
 Made of his note tame and milde,
 The Hinde in pes with the Leoun,
 The Wolf in pes with the Moltoun,
 The Hare in pees stod with the Hound ;
 And every man upon this ground
 Which Arion that time herde,
 Als wel the lord as the schepherde,
 He broghte hem alle in good acord ;
 So that the comun with the lord,
 And lord with the comun also,
 He sette in love bothe tuo
 And putte away malencolie. (Prologus, 1053-69)

同様に、Ovid の *Fasti* に述べられている。

Quem modo caelaturn stellis Delphina videbas,
 is fugiet visus nocte sequente tuos :
 seu fuit occultis felix in amoribus index,
 Lesbida cum domino seu tulit ille lyram.

quod mare non novit, quae nescit Ariona tellus?
carmine currentes ille tenebat aquas.
saepe sequens agnam lupus est a voce retentus,
saepe avidum fugiens restitit agna lupum ;
saepe canes leporesque umbra iacuere sub una,
et stetit in saxo proxima cerva leae,
et sine lite loquax cum Palladis alite comix
sedit, et accipitri iuncta columba fuit.
Cynthia saepe tuis fertur, vocalis Arion,
tamquam fraternis obstipuisse modis.
nomen Arionium Siculas impleverat urbes,
captaque erat lyricis Ausonis ora sonis ;
inde domum repetens puppem conscendit Arion,
atque ita quaesitas arte ferebat opes.
forsitan, infelix, ventos undasque timebas,
at tibi nave tua tutius aequor erat. (*Fasti*, ii. 79-98)

修辞学（雄弁術）によって、人は言葉の並べ方、緩め方、締め方、明快な語り方等を学ぶことができる。論争においては、言葉を正しく使わなければならない。装飾のない真実を語り、かつ巧みな詭弁を打ち負かすために、誠実さで議論を締め括らなければならないのだ。政治学の第一の要点は、誠実さ（*veritas*）である。ここでも Gower はモラリストとしての顔を覗かせている。

Moribus ornatus regit hic qui regna moderna,
Cercius expectat ceptra futura poli.
Et quis veridica virtus supereminet omnes,
Regis ab ore boni fabula nulla sonat.

アリストテレスは、アレキサンダーに若い時代に (*in his youthe*) 誠実の美德 (*grace [of trouthe]*) を全身で抱き、世人に対して言葉は真実で正直で (*trewe and plein*)、かつ二枚舌 (*double speche*) がないほど言葉は確実であると教えた。Gower が言葉に対して抱いていた理想は、言葉は ‘*plein*’ でなければならないこと、即ち「一語一意」こそ彼の願望であった。彼が意図したのは、言葉の多義性や曖昧さとはおよそ縁遠いものであった。言葉の曖昧さこそ、二 (*double*) 枚舌に他ならなかった。ここに彼の詩人としての個性があり、またモラリストとしての本領がある。

Among the vertus on is chief,
And that is trouthe, which is lief
To god and ek to man also.
And for it hath ben evere so,
Tawhte Aristotle, as he wel couthe,
To Alisaundre, hou in his youthe

He scholde of trouthe thilke grace
 With al his hole herte embrace,
 So that his word be trewe and plein,
 Toward the world and so certein
 That in him be no double speche :
 For if men scholde trouthe seche
 And founde it nocht withinne a king,
 It were an unsittende thing. (7.1723-36)

この引用例に Gower の言語観がよく現れている。言葉は ‘plein’ でなければならない。‘plein’ は ‘of the truth: whole, complete, full’ の意味である。‘trewe and plein’ (2.1912,7.1731), ‘trewe hertes and with pleine’ (Prol. 184) に見られるように, ‘plein’ と ‘trewe’ とは同義語である。また, ‘word be trewe and plein’ (7.1731) の他に, ‘pleine trow (u) the’ (1.1126,4.704,7.1638,7.2340,7.2442) ‘wordes pleine’ (2.2919,5.4911,7.2343,7.2350) ‘pleine wordes’ (7.1534,8.2185) に見られるように, 直接 ‘trow (u) the’ 「真実」と ‘word’ 「言葉」とに結合する形容詞は ‘trewe’ ではなく全て ‘pleine’ である。これに対して ‘plein(e)’ の反義語は ‘double’ で, ‘double entente’ (2.494,2.2192), ‘double speche’ (7.1733) ‘of actions, words, meanings: intentionally ambiguous, deceitful, deceptive’ のように使われている。

Gower が力説するように, 言葉は内なる心の表れである。‘tokne’ は ‘a visible indicator of an inward state’ の意味である。

The word is tokne of that withinne,
 Ther schal a worthi king beginne
 To kepe his tunge and to be trewe,
 So schal his pris ben evere newe. (7.1737-40)

私たちは, 日常において口を慎み, 真実を語ることを心掛けなければならない。一度発せられた言葉を取り消そう (debate ‘to retract (one’s words)’) としても無駄である。

次に述べられたことは, ダリウスの三人の側近に対する質問の伏線となっている。王は最高権力者であるから, 最も徳のある (力のある) 人物であるべきだ。ここでも ‘pouer’ と ‘vertuous’ が対比される。

For as a king in special
 Above all othre is principal
 Of his pouer, so scholde he be
 Most vertuous in his degre ; (7.1745-48)

Gower は王冠 (corone) が何を象徴しているかという視点から話を始める。王冠の黄金 (the gold, 7.1751) は, 人々が主君として尊敬すべき優越 (excerence, 7.1751) さを示している。宝石 (the Stones, 7.1754) は三つの点で称賛される。第一に, 堅くて (harde) , 志操の堅固さ,

つまり心変わりをしていない (Constance 'no variance in his condicion') ということを表している。第二に、宝石の効能 (vertu) は王は正直で (honeste), 約束を守る (holde trewly his beheste) ということである。第三に、宝石の中の輝かしい色彩 (the bryhte colour.. in the stones) は、世間の名声の歴史 (the Cronique of this worldes fame) である。誠実 (trouthe) は美徳の君主 (the vertu sovereign of alle) であるから、その例話として「王、酒、女と誠実」の話が取り上げられることになる。

昔、ペルシャのダリウス王 (Daires) は、アルパゲス (Arpaghes), マナシヤス (Manachaz), ゴロバベル (Zorobabel) という三人の賢明な側近を抱えていた。王は心から彼らを信用していた。彼はこの三人に「酒、女、王の中で一番強いものは何か」と尋ねた。

Of thinges thre which strengest is,
The wyn, the womman or the king : (7.1812-13)

王は彼らに丸三日の猶予 (fulli daies thre, 7.1816) を与えた後、三人から回答を得た。しかし、それぞれが全く異なる意見を述べた。

アルパゲスは王に加担して「王は道理を弁え、創造物の中で最も気高い人間を支配するのであるから、王が最強である。王は法を超越して、法の制約を受けず、人を生かすも殺すも自由で、生殺与奪の権利を完全に握っている。」故に、王の力が最も強く、最も力 (価値) があると答えた。勿論、'value' には二つの意味が込められている。

A kinges myht..
Is strengest and of most value. (7.1846-48)

マナシスは酒が王よりも威力があると答えた。'emprise' は 'power, potency' で 'the more powerful' の意味である。

.. wyn is of the more emprise. (7.1850)

更に、彼は「酒は人の心から理性を奪い、足萎えを走らせ、敏捷な人から手足の自由を奪う。酒は盲人の目を開かせ、また健全な人の目を暗くさせる。酒は無学なものを学者に、学者から学問を奪う。酒は臆病者を大胆に、欲張りを気前よくさせる。酒は王権よりもはるかに人の心を屈服させる力がある。」故に、酒が一番威力があると答えた。

最後に、ゼルバベルは「王もブドウ作りも共に女から生まれたのだ。男は恋の力により女に従わなければならない。女は男の救い、命、死、禍い、幸せである。」

A womman is the mannes bote,

His lif, his deth, his wo, his wel. (7.1912-13)

従って、ゼルバベルは女が一番強いと答えた。

.. wommen ben the myhtieste.
The king and the vinour also
Of wommen comen bothe tuo. (7.1872-76)

更に、彼は例話として『アルセステの話』を持ち出す。アドメトリス王が病気になった時、妻のアルセステが死ねば彼の命が助かるという神のお告げがあった。彼女はお告げ通りに死んだ。すると、王は全快したのだ。故に、最終結論として、彼は酒、女、王よりも誠実さが最も強いと答えた。

What strengest is of erthli thinges,
The wyn, the wommen or the kinges,
He seith that trouthe above hem alle
Is myhtiest.. (7.1953-56)

誠実な者は人生に悔いを残さない。誠実でない者は無力なのだ。このように、誠実こそアレキサンダーに授けられた徳目の筆頭であると、Gower は自己の信念を主張する。

注

The Complete Works of John Gower, 4 Vols. ed. G. C. Macaulay (Michigan : Scholarly Press, Republ. 1968).
引用は全てこの版による。

(To be continued)